

《研究ノート》

## 社会秩序の問題に対する信頼論のもつ可能性について

中西 みゆき

### はじめに

社会秩序はいかにして可能か。この社会学の根本問題をパーソンズ(Parsons, T.)は、『社会的行為の構造』[Parsons, 1937=1974-86]の中でホップズ問題として定式化し、問題の解決を共通価値説に求めた[Parsons, 1937=1974-89]。その書評をシュッツ(Schutz, A.)が書き、感想をパーソンズに求めたことから、いわゆるシュッツ=パーソンズ論争[Schütz & Parsons, 1977=1980]が始まる。しかし、二人の主観性理解をめぐる論争は、いくつもの議論へと発展する可能性をもっていたにも関わらず、短期間で終結してしまう。本稿ではその可能性のひとつとして、共通価値説をめぐる問題をとりあげたい。この問題は論争では直接扱われることはなかったが、シュッツによるパーソンズ批判の中に既に含まれていたと考えられる。本稿ではまず、シュッツ=パーソンズ論争をとりあげ、共通価値説が社会秩序の解ではなく、新たな問いとして展開しうるものであったことを確認する(第1節)。

そして、この可能性を展開したものとしてガーフィンケル(Garfinkel, H.)とルーマン(Luhmann, N.)の議論をとりあげる。ふたりはともにパーソンズに師事し、同時にシュッツや現象学の知見をとりいれている社会学者である。本稿で着目するのは、両者がともに共通のテーマで、社会秩序を考察している点である。その共通のテーマとは「信頼」である。ガーフィンケルの「安定した協同的行為の条件としての『信頼』の概念、および実験」[Garfinkel, 1963]と、ルーマンの『信頼——社会的な複雑性の縮減メカニズム』[Luhmann, 1968=1990]は、ともに社会秩序と信頼を扱っているが、その内容は共通性にと

もに、逆の方向性を示している。本稿は両者の議論を、共通価値説と社会秩序の問題に対する批判的展開として検討する。その際、ガーフィンケルの議論をシュッツ的側面からの展開（第2・3節）、ルーマンの議論をパーソンズ的側面からの展開としてとらえ（第4節）、両者の議論がどのような社会秩序像を呈示し、信頼がそれにどのように関わるのかについて考察する。

## 1. ホッブズ問題とシュッツ＝パーソンズ論争

この説ではまず、パーソンズによるホッブズ問題の定式化の手続きを紹介し、そしてシュッツ＝パーソンズ論争が、ホッブズ問題の解であるとされた共通価値説に、間主観的同一性の観点から問題を提起するものであったことを述べる。

ホッブズ問題とは、社会秩序の条件についてホッブズの議論をもとにパーソンズが定式化したものである〔Parsons, 1937=1974-86:第3章〕。ホッブズは、もっとも合理的な手段によって自己保存を追求する自然権をもつ諸個人が自由に私的利益を追求しようとするれば、「万人の万人に対する闘争」状態を帰着するとした。もし二人の者が同一のものを要求し、同時に得ることができないのならば、相互に敵対しあうことになる。これに対してホッブズは、利害の合致による社会契約という解決を導き出した。しかし、パーソンズはこの解決は、行為者が自分のおかれた状況において目的を合理的に追求するだけではなく、状況全体を理解し、自分の将来の利益を犠牲にしてまで、安全を得ようとする点で合理性<sup>(1)</sup>を過度に拡大していると同時に、利害の合致という点が功利主義の前提である、目的のランダム性と矛盾するとしてしりぞけた。このような功利主義的解決のパラドックスに陥らないためパーソンズがとったのは、利害をこえた共通の価値体系の受容（制度化と内面化）という解であった。したがって共通価値はパーソンズの主意主義的行為理論が功利主義的理論を克服するための鍵概念となったのである。

しかし社会秩序の解としてパーソンズが共通価値説をとったことは、彼を功利主義とは異なる批判に巻き込んでしまう。パーソンズの説にしたがえば、行為者は共通価値によって規定される正統な役割行為しか遂行できない人形のよ



うな存在でしかない。そのため行為者のもつ創造的・能動的な面がパーソンズの理論では無視されてしまう。こうしたパーソンズの社会学がもつ規範的人間像に対する批判<sup>(2)</sup>は1960年代にわき上がることになる。しかし、この種の批判は共通価値説そのものを否定しきれているわけではない。個人の創造性・能動性を強調する批判は、共通の価値が人々の行為に対して一定の秩序を与える働きをもつというパーソンズの立場からは「共通価値に縛られない、個人が自由に振る舞う部分もある」という付言によって切りかえされてしまう。

それに対し、パーソンズの立場そのものを、きわめて早い時期に問題にした人物としてシュッツがあげられる。シュッツによるパーソンズの「主観」理解に対する批判には、他者と何かを「共通して」認識することが可能なのか、またできるとすればどのようにしてなのかという疑問が含まれている点はきわめて重要である。なぜならそこにはパーソンズのいう共通価値説が、真に社会秩序の解なのかを問う可能性があらわれているからである。シュッツ＝パーソンズ論争 [Schütz & Parsons, 1977=1980]<sup>(3)</sup>において、シュッツが問題にしたのは、パーソンズの主意主義的行為理論における「主観的見地」の不徹底性である。

「行為者の心のなかの主観的諸事象を、観察者だけに接近できるその事象の解釈図式ととり違え、したがって主観的現象のための客観的図式とこの主観的現象自体とを混同してしまっている」

[Schütz & Parsons, 1977=1980:110]

パーソンズはこれに対し、個人の主観そのものを扱うことは不可能であると反論する。

「私の見地からみますと、主観的見地と客観的見地との間にあなたがおひきになっている対照は非現実的であります。“純粹に”主観的見地をあらわすような一群の知識とか科学的に重要な経験というようなものではありません。主観的な現象は観察者によって記述されまた分析されるものとしてのみ意味をもっています」 [Schütz & Parsons, 1977=1980:195] (注：強調は原著者)

ここでパーソンズは自分の立場を観察者として適切な立場であるとして、シュッツの批判をしりぞけている。しかし、このシュッツの批判にこそ、シュッツ＝パーソンズ論争が発展する可能性があったと考えられる。シュッツのとり主観の徹底という立場は、パーソンズの議論の核心であり、その後の議論の前提でもある共通価値が、本当に「共通」な価値なのかという点に重大な疑問を投げかけている。主観の徹底をつきつめて行えば、異なる主観をもつ者どうしの中で「共通」な認識がそもそも可能なのかという問いが立つ。シュッツはこの点について後年より自覚的に述べている。

「すべての社会科学は思考と行為の間主観性を当然のことと考えている。

仲間たちが存在すること、人々が人人に働きかけること、象徴と記号によりコミュニケーションが可能であること、社会集団や制度、法的、経済的諸体系などがわれわれの生活世界を統合する構成要素であること、この生活世界はそれ自身の歴史をもち、時間、空間と独特の関係をもっていること——これらすべてが、あらゆる社会学者の仕事にとって、明示的であれ暗黙のうちであれ根本的な概念としてある。

……しかし、いったいどうして相互理解とコミュニケーションが可能となるのか。人が意図的にせよ習慣的にせよ有意義な行動をなすこと、かれが達成されるべき目的に導かれたりある種の経験に動機づけられたりすることは、いかにして可能なのか。……」 [Schutz, 1964=1980:314-315]

パーソンズが言う共通価値は、シュッツによって立つ懐疑的な立場からすれば素朴で不徹底なものでしかない。この懐疑的立場は、パーソンズが前提として問うことがなかった、異なる主観をもつ人々の間で同一のものを共有することがいかにして可能なのかということを問題とする。そこでシュッツは、主観的観点にもとづいた社会（科）学というヴェーバーの理解社会学の構想を高く評価し、それに対する哲学的な基礎づけの必要性を感じ、その可能性をベルグソンの哲学、そして他者の行為の意味理解の構成をフッサールの現象学に求めた。一方、パーソンズはそのようなシュッツの立場を過度に哲学的であるとしたりしりぞけてしまう。こうしてシュッツによる書評原稿を引き継いでの書簡に



よる私的な論争は、両者の議論がかみあうことのないままパーソンズによるシュッツの全面的否認で終わってしまった。

シュッツ＝パーソンズ論争は、シュッツとパーソンズの主観性理解の違いをめぐるものであった。観察者が観察可能なものに主観を限定してとらえるパーソンズに対して、シュッツは行為者の内部でおこる心理的な現象としての主観の重要性を主張した。シュッツの立場では、共通価値は社会秩序の「解」ではなく、間主観的同一性の水準における「問題」としてあらわれる。これはパーソンズが前提と見なしていたものを疑問視することで、パーソンズの議論を異なる位相へと導くはずであった<sup>(4)</sup>。

この宙づりになった問いに対して応えた代表的な人物として、本稿ではガーフィンケルとルーマンを取り上げる。ガーフィンケルはシュッツの現象学的問いを継承しつつ、間主観的同一性から社会秩序の問題にとりくんだ。一方、ルーマンはパーソンズのシステム論を継承し、後にパーソンズが秩序問題の基礎として新たに定式化した、ダブル・コンティンジェンシーの理論から社会秩序の問題にとりくんだ。次節では、シュッツ的立場を徹底すると、パーソンズの社会秩序問題にどのような批判ができるのかをより明らかにするため、ガーフィンケルの博士論文『他者の知覚——社会秩序に関する一研究——』[Garfinkel, 1952]をとりあげる。

## 2. 『他者の知覚』

ガーフィンケルは博士論文である『他者の知覚』のなかで、ホップズ問題という形で社会秩序問題の抽出を批判しつつ、共通価値という概念のもつ問題点を指摘し、間主観性問題を社会秩序の問題として再定式化している。彼は論文の目的をパーソンズがとりあげた事実性のレベルではなく「行為の前提レベルでの秩序問題——間主観性の問題をシュッツの同一説にもとづいて理論的に呈示すること」[Garfinkel, 1952:151]として、シュッツの路線を継承することを明示している。ガーフィンケルのパーソンズ批判を要約すると次のようになる。

ガーフィンケルは、ホッブズ問題の定式化の批判において、ホッブズとパーソンズによる合理性の概念が不適切であるとした。もし彼らの言う合理性、つまり科学的合理性がわれわれの活動に採用されるのなら、帰結されるのは「万人の万人に対する闘争」という混沌ではなく、没交渉な単体のあつまりであり、活動停止状態である。つまりホッブズ問題は科学的合理性を前提として考える限り、成立しえない。ガーフィンケルは科学的合理性は科学者が責任を負うべきものであり、一般的な行為者はそれとは区別される自然的態度の合理性に従って行為するとした。

では、自然的態度の合理性に基づいて行為しようとするればホッブズ的な闘争状態を帰結するのだろうか。ガーフィンケルはこれについて、「同一のもの」というホッブズの定義を指摘する。ホッブズはもし二人の者が同一のものを要求し、同時に得ることができないのなら、それぞれは相互に敵対しあうことになるとしたが、そもそも二人が「同一」のものを要求することがいかにして可能かについてホッブズは問うていない。しかし、二人があるものを「同一」のものとして要求するためには、二人がそれを「同一」のものと知覚しなくてはならない。つまり、「万人の万人による闘争」状態の前段階において、闘争を可能とするような秩序が存在するのである。そして、ガーフィンケルはこのような秩序がいかにして可能かということを社会秩序の問題として設定した。

このようにガーフィンケルがパーソンズとは異なる位相で秩序を問題にするのは、彼の主張によれば、自らが「同一説」<sup>(5)</sup>を採用するためである。パーソンズの採用する「対応説」では、現実世界とその主観的解釈との間を区別している。同時にカント的伝統に立つ対応説では、科学的な方法を利用することで対象の正確な再現に近似することができ、そのような特権の立場にあるのが科学者である。対応説では行為者が科学的合理性に従って行為することが可能なため、対象の同一性は結果として保証されるのである。パーソンズにおいて対象の同一性が問題にならなかったのはこのためである。ガーフィンケルはそれに対してシュッツの同一説を取り上げる。フッサールの伝統に立つ同一説では、知覚された対象と具体的対象は同一である。正確には具体的な対象が独自に存在するのではなく、知覚されることで初めて対象が存在する。同一説の立場では特権的な観察者の位置はなく、異なる知覚の間で異なった複数の世界が発生



し、パーソンズ的な対象の同一性を前提する事は不可能になる。

ガーフィンケルはこのようにホブズ問題と共通価値説を批判した。しかし『他者の知覚』で実際呈示されたのは単独の行為者による秩序の組織化と存続の可能性で、間主観的な状況のそれではなかった。ガーフィンケルがこの問題にあらためて取り組んだのが「安定した協同的行為の条件としての『信頼』の概念、および実験」（以下「トラスト」論文と省略）である。

### 3. 「トラスト」論文

「トラスト」論文は、三目並べというゲームに関する実験と、日常生活世界という、より実践的な場に考察を進めるための会話実験を中心に進められる。ガーフィンケルは既存のゲームの一連のルールは、以下の三つの特徴を示しているとする<sup>(6)</sup>。

- (1) ルールの自分自身に対する妥当の期待
- (2) ルールが、自分だけでなく、他者にも間主観的に妥当することの期待
- (3) この期待が、自分だけの期待ではなく、他者と共有された間主観的な期待であることの期待

ガーフィンケルはこれら三つの特徴（期待）を、「構成的期待」とよんだ。そして彼はこのような「ある人々の環境の取り扱いが構成的期待によって支配されている場合、その人たちはお互いを『信頼』している」[Garfinkel, 1963:193]。また一方で、「ある人が別の人を『信頼』していると述べることは、その人が、行為を通して、プレイの基礎的ルールのなかに描かれているできごとの規範的秩序と一致するようなできごとを現実を生みだすような仕方で行おうとしていることを意味している」[Garfinkel, 1963:193]と述べている。「基礎的ルール」とは、構成的期待が与えられた（構成的アクセントが与えられた）選択肢の集合のことをさしている。これらの定義については後でまた振り返ることにする。

三目並べ実験は、安定した共同行為の状況として、三目並べゲームを扱うことから始まる。実験者と被験者が三目並べを行い、途中で実験者は通常の三

目並べのルールにはない行動をとる。ガーフィンケルはこの違背実験の結果、被験者は正常なゲームの状態へ復帰しようとしつつ、混乱するものと期待していた。実際多くの人が混乱を示した。

一方、会話実験は三目並べ実験的な状態を、日常生活の領域で発生させるため行われた。会話実験のひとつでは、実験者は会話相手が何気なく使う「当たり前」の会話の意味を相手に説明するよう求めた。被験者である会話相手はこれに当惑し、“You know what I mean.” [Garfinkel, 1963:221] という返事をした。

ガーフィンケルはこれらの実験を通して、間主観的同一性が何によって支えられているかを説明しようと試みた。会話実験において、被験者は「当たり前」のものとして日常使っている言葉の意味を、“You know what I mean.” 以上の言葉で説明しようとしなかったが、そもそもそれ以上説明ができなかったのである。このことは会話の意味というものが、確固とした共通のものではなく、「共通である」と思われているにすぎないことを指し示している。そこでガーフィンケルは、構成的期待がゲームだけでなく日常的な状況においても存在し、われわれの日常生活の秩序を支えていると考えた。彼は日常生活世界では、ゲームの基礎的ルールに代わり、「常識」があり、その「常識」を支えているのが、構成的期待であるとした。

会話実験が明らかにしたように、常識という「他者と共通に知られている」こと、つまり間主観的同一性とは実際に「共通に」知られているのではなく、「共通に知られている」と信頼することに支えられているにすぎないのである。ガーフィンケルが間主観的同一性の中に見いだしたものは、パーソンズの共通価値説のような安定性を欠いた、「信頼」という不安定な期待を背景にした秩序であった。

だが、ガーフィンケルの議論にはいくつかの不備が見られる。先に述べたように、彼が構成的期待に支配されていることと、基礎的ルールに従うこととを厳密に区別しなかったことは、三目並べ実験の予想外の結果を分析することを難しくしてしまったと考えられる<sup>(7)</sup>。三目並べ実験において、実験者の行為を「別のゲームへの移行」と解釈して、ほとんど混乱をおこさずに新しいゲームをはじめた被験者が、ほぼ1割存在していた<sup>(8)</sup>。しかしガーフィンケルはこの1割の結果について詳しく言及することなく、会話実験に移行している。会話実



験は構成的アクセントを付与されている常識が、あまりに（一見）安定的であるため、常識を破棄する行動はほとんどの場合、困惑や怒りを引き起こした。つまり会話実験では、常識という基礎的ルールを破棄することによって、構成的期待がさらけだされるような状況が作り出しやすいのである。ガーフィンケルの目的である、日常世界の秩序を支えている信頼を明らかにするためには、この実験のほうがより効果的で説得的であるのは、言うまでもない。だが、三目並べ実験の残された結果は何を意味しているのであろう。

これについて浜 [1995, 1996a, 1996b] は基礎的ルールに従うことと、構成的期待に支配されていることを厳密に区別し、前者を「信頼1」、後者を「信頼0」と呼んで、解釈をおこなっている。前述した三目並べ実験において、新しいルールのゲームを「続行」した被験者たちは、三目並べというゲームは放棄したが、実験者がなんらかのルールに従って（拘束されて）ゲームを行っていること、そしてそのなんらかのルールに従って被験者自身も行為することを期待しているという構成的期待自体は放棄していないことを示すものであった。つまり被験者はより基底にある水準の信頼、構成的期待（信頼0）を放棄しないで、構成的アクセントを付与する基礎的ルール（信頼1）だけを変更したのである<sup>(9)</sup>。

すでに述べたように、「トラスト」論文においてガーフィンケルは、間主観的同一性という社会秩序は、構成的期待という信頼に支えられただけの、底の抜けたものであることを明らかにしている。浜の視点を取り入れて、ガーフィンケルの信頼論を解釈すると、次のようなことが言えるであろう。三目並べ実験で実験者がとった行為は混乱を生じさせるためのもので、ルールの破棄が目的である。それに対して1割の被験者たちは、実験者が自分の駒を勝手に動かしたのを知り、構成的アクセントを移動させ、実験者の行為に適合するルールを事後的に「発見」し、それを遡及的に適用することによって実験者の行為を正常化（ゲームを存続）することに首尾よく「成功」した。つまり、この結果が明らかにしていることは、ガーフィンケルが見いだした秩序のもう一つの側面、その都度その都度行為者によって構成され、達成される秩序という動的な秩序のありかたである。

ガーフィンケルはシュッツを継承し、間主観的同一性の問題を遡り、構成的期待という信頼を背景として形成される社会秩序像を呈示した。そしてそれは

底が抜けているゆえに動的なものであり、パーソンズの描いた、共通価値を受容することで成立する安定的で構造的な秩序とはまったく異なったものである。ガーフィンケルの呈示した社会秩序像は、シュッツ＝パーソンズ論争によって生まれた新たな社会秩序の問題に対する一つの答えと言える。

#### 4. 『信頼——社会的な複雑性の縮減メカニズム』

ガーフィンケルに対し、ルーマンは一般システム論の成果を取り入れ、パーソンズの社会システム論を批判的に継承した。彼は現象学の知見を自分の理論に取り入れているが、個人を主観の単位とせずシステムという概念を堅持し、地平概念を批判していることから<sup>(10)</sup>、本稿ではルーマンをシュッツ＝パーソンズ論争のパーソンズ側からの継承者として位置づけたい。そしてダブル・コンティンジェンシーという概念こそ、この批判的継承において、極めて重要な役割を占めていると考えられる。

ダブル・コンティンジェンシーは、本来パーソンズが前期のホップズ問題にかわるものとして、中期の『行為の総合理論をめざして』[Parsons, 1951=1960]において、定式化した概念である。ダブル・コンティンジェンシーという形で秩序問題は、複数の行為者の相互行為における安定条件は何かというかたちで再び問われるが、その解が共通価値であることは前期パーソンズと同様である。このことからパーソンズにおいて一貫して問われているのが、秩序の問題であることがわかる。

二人の行為者が相互行為をする場合、一般に行為者の行為は他方の行為者の反応に依存し、他方の行為もまたこちらの反応に依存することになり、一種の不確定状態を生み出す[Parsons, 1951=1960:25]。このような事態をパーソンズはダブル・コンティンジェンシー（二重の条件依存性）と呼んでいる。パーソンズはこの不確定状態に対し、両者が共通の価値をうけいれ、それに同調した行動をとることで相互行為が安定すると考えた。相互行為の場では、共通価値に同調することで行為者自身に有利な結果と欲求充足をもたらすからである。パーソンズにおいてホップズ問題の解決はまた、ダブル・コンティンジェンシ



一問題の解決でもある。しかし、当然このような議論も、ガーフィンケルが『他者の知覚』で行ったような批判を免れることはできない。共通価値を解とするかぎり、彼の社会システム論は困難を孕んだものとなる。

それに対してルーマンは、パーソンズのような解は社会的文化的進化も逸脱した社会化とみなしてしまうとして退けた [Luhmann, 1984=1993/95:160]。ルーマンはダブル・コンティンジェンシーという概念を再定式化することで、パーソンズとは異なるシステム論に到達する。彼はダブル・コンティンジェンシーを「二重の偶有性」として捉える。ルーマンにおけるダブル・コンティンジェンシー状況では、互いの行為を予期するだけでなく、相手が自分自身の予期をどう予期しているかが予期されている。自己の予期において既に他者がどのように予期しているかが想定され、それを背景に自己は行為をする。しかし、他者の行為は常に期待はずれに終わる可能性をもつため、予期は最終的には安定しえない。つまり、パーソンズのように、自己と他者の行為が観察者の視点において二重に不確実であるというのではなく、ルーマンにおいて二重性の不確実性は、行為者自身の内で生起する。したがって、パーソンズのような共通価値によって、この状況が克服されるのではなく、期待はずれというずれが予期の中に再びフィードバックすることによって次の行為が準備され、こうしてダブル・コンティンジェンシーは究極的な共通価値をもたないまま、動的な秩序をうみだしていくとされる。

「確固とした価値コンセンサスがあらかじめ存在する必要はまったくない。ダブル・コンティンジェンシー（それは、何ものにもよっても満たされない、閉じられた、想定しえない自己準拠にほかならないのだが）の問題は、まさしく偶然を吸引しているのであり、偶然に対して敏感に反応している。たとえ価値コンセンサスがないとしても、それは創り出されるであろう。神が何も与えないとしても、システムは生じるのである。」 [Luhmann, 1984=1993/95:161]

ルーマンのダブル・コンティンジェンシー状況では、それぞれの行為が共通価値のような、コンセンサスに基づいていなくても、後続する予期に対して意味をもつことで、行為の連鎖をうむことになる。ルーマンは、ダブル・コンテ

インジェンシー状況が、社会秩序の不確実性を明らかにすると同時に、社会秩序が共通価値のような奇跡的な契機を必要としない「正常なこと」であるとした。こうしてルーマンは、ダブル・コンティンジェンシー概念の再定式化によって、ホプズ問題における「いかにして社会秩序は可能か」という問いに解決を与えるのではなく、問いそのものを解消したのである。

しかし期待はずれが避けられないがゆえに、ダブル・コンティンジェンシー状況における行為はリスクを伴わざるをえない。そこでリスクがあるにもかかわらず行為を可能にする戦略の一つとしてルーマンは信頼をあげている。ルーマンによれば、あるシステムが環境（それには別のシステムが含まれている）を信頼するのは、システムにとって必要な情報が不足しているときである。信頼が形成される背景、あるいは信頼が必要となる背景には、行為者にとって必要な情報が不足しているという事態がある。そして信頼は、「情報不足を、内部的に保証された確かさで補いながら、手持ちの情報を過剰に利用し、行動予期を一般化する」[Luhmann, 1968=1990:176] ことで時間構造の中で社会的な複雑性を縮減し、システムが環境に対して働きかけることを可能にする戦略である。

このような信頼という戦略はルーマンによれば、普遍的かつ無根拠なものである。たしかに行動するのに必要十分な知識を持ち、他者の行動や状況の展開に正確な見通しを立てることができるのなら、信頼は不要である。ルーマンは「信頼は、世界を成り立たせている唯一の基盤ではない」[Luhmann, 1968=1990:176] と言い、複雑性の縮減を担う他の等価物として、合法性、稀少性、真理、愛などをあげている。しかし彼自身の理論では、いかなるシステムにおいても環境の複雑性はシステム自体の複雑性よりはるかに大きいものである。ということは、環境の複雑性に対処できるような完璧な情報を得ることは根元的に不可能であり、したがって（あくまでも実践的な場において）システムが環境に対処する際、信頼が導入される契機はつねに含まれていると言える。さらに信頼が持つ特徴として、ルーマンは信頼が成立するために必要な最低限の情報は、「跳躍台」としての役目しか持たず、信頼はそれ自体つきつめていってもその底には確たる根拠はないと述べている。信頼は、それ自体を自ら前提とし、それ自体をみずからで確証するという循環的な性格を持つという。



「信頼/不信頼——シンジロームは、一方ではあらかじめチェックしえないリスクにかかわらざるを得ない——そうしなければまさに信頼の機能を拒絶せざるを得ない——という特別の状況においてのみ重要になる特別の事態なのである。ところが他方において、ダブル・コンティンジェンシーの見いだされるすべての状況はもともとこうした性格を有している。というのも、こうした状況では、相手がこちらの決定に対応して決定をする前に、本人が自己決定をするという自他の決定のシークエンスが必ず見いだされるからである。そうであるかぎりにおいて信頼は、普遍的な社会的事実である。」 [Luhmann, 1984=1993/1995:200-201]

「信頼は、究極的にはいつも基礎づけえないのである。信頼は、目下手元にある情報から、与えられた以上のものを引き出すことによって成立する。既にジンメルが気付いていたように、信頼は知と無知の合成なのである。……それら [なぜ信頼するのかに関わる理由] は、いずれにせよ信頼を [あるところに] 置くことを支えるのであって、信頼そのものを支えるのではない。信頼は、相変わらず冒険なのである」

[Luhmann, 1968=1990:43-44] (括弧は訳本のまま)

この理論的な前提をもとにルーマンは、人格的信頼からシステム信頼への社会進化などを説明する。ここではその詳細には立ち入らないが、ルーマンが幅広い説明力を主眼としている点は、ガーフィンケルとは異なる彼の大きな特徴である。こうしてガーフィンケルによって疑われたホプズ問題という定式は、ルーマンによるダブル・コンティンジェンシー概念の再定式化を通じて、秩序以前の問題状況ではなく、秩序に常に内在する常態として捉えなおされ、そしてガーフィンケル（あるいは浜）が提起した信頼という概念は、普遍的かつ無根拠であることが明示されたうえで、ダブル・コンティンジェンシー状況に対する戦略として明確な位置を与えられたのである。

## おわりに

シュッツ＝パーソンズ論争は、主観性理解に対する両者の見解の違いから始まった。シュッツがたつ現象学的視点は、間主観的同一性を問題とするもので、パーソンズの共通価値説は、シュッツの立場からすると社会秩序の解ではなく、一つの問題へと位相を移すことになる。ガーフィンケルはシュッツの観点を引き継いで、パーソンズによるホップズ問題という秩序問題の定式化と、共通価値説を批判し、間主観的同一性を秩序問題として定式化した。そして違背実験を通して、社会秩序を支えているのは安定した価値などではなく、構成的期待という信頼であることを示した。他方ルーマンはパーソンズの社会システム論・概念を引き継いだが、ダブル・コンティンジェンシーのほりさげを行い、それを「解決」しえない、秩序に内在する必須の条件として見出しつつ、共通価値を必要としない秩序の創出を記述する。

彼らがそれぞれの手法で共通価値説とホップズ問題をのりこえようと試み、その結果獲得された社会秩序像は、ともに底の抜けた、偶然と無根拠性にさらされたものだった。ガーフィンケルにおける構成的期待とルーマンにおけるダブル・コンティンジェンシー、そして両者が用いる信頼論、およびこの社会秩序の不可能性を呈示する結論は、それゆえ新たな社会秩序のかたちをも呈示する。彼らが見いだした底の抜けた社会秩序は、不安定であるが、動的でもある。共通価値説が帰結するような静的な社会秩序像ではない、常に変化の可能性に開かれた秩序像は、秩序が究極的に底なしであることによって可能になる。両者の議論において、信頼は安定的基盤を欠いた秩序を支え、その生成を可能にするものとして機能している。

このように、パーソンズの共通価値説を出発点とし、信頼論を通じて記述される両者の社会秩序像は極めて近いものがあるのだが、しかし両者の議論はまったく異なった位相のもとにあるとも考えられる。まずガーフィンケルは共通なものがいかにして可能なのかを実験を通じて明らかにしようと試みる。いわばパーソンズの共通価値説の手前を追求しようとする。一方ルーマンはダブル・コンティンジェンシーを前提として、共通価値を必要としない社会システム理論を構想し、パーソンズの巨大理論をさらに完成に向けて展開しようとする。



る。つまりガーフィンケルの志向性が実験による「前提レベル」の精密な記述に収斂していくのに対して、ルーマンの志向性は理論によって前提をクリアして、広範な対象に説明が拡散していくのである。方法、対象、観察目的が、いわば正反対であると言える。このことは、彼らの導き出した社会秩序がもつ動的な要素が、ルーマンの中では説明されていたのに対して、ガーフィンケルにおいては浜の解釈を待たなければならなかったことと対応していると考えられる。同様に、信頼の取り扱いの違いからも指摘が可能である。

前述したように両者の議論の中で、信頼は安定的基盤を欠いた秩序を支え、その生成を可能にするものとして機能している。ガーフィンケルにおいては、基礎的ルールに従うことと、構成的期待に支配されていることの双方が、「信頼」とされている。浜はそのうち構成的期待に支配されていることを「信頼0」とよび、より基底的な信頼としている。他方ルーマンにおいて、信頼はシステムが環境に働きかけることを可能にする戦略のひとつである。つまりダブル・コンティンジェンシーと社会秩序の間を結ぶ手段として理解することが可能である。ガーフィンケルが結論として導き出したものをルーマンが前提としている点、また前者がより具体的な状況を扱うのに対して後者が抽象的な理論的水準を扱っている点など、両者の議論を重ね合わせるのは乱暴なことかもしれない。しかしルーマンがダブル・コンティンジェンシー、信頼、社会秩序を異なるものとして扱っていることを考慮すると、ガーフィンケルの議論においても基礎的ルールにしたがうことと、構成的期待に支配されていることは厳密に区別されるべきであろう。そして前者は信頼というよりも秩序であり、信頼は、浜が「信頼0」とした後者と考えるのが適切ではないかと思われる。

本稿は、信頼概念の精密さという点では、ガーフィンケルよりもルーマンの方が高度であると考えている。しかしルーマンの理論からは実験が排除され、理論的前提はすべて「過度に哲学的に」抽出されたものとも言うことができる。かつてパーソンズがシュッツに対して行った批判が、ここではシステム論を引き継いだルーマンに対して投げかけられる。このような皮肉が示すのは、社会学が実験という科学性と哲学的な思弁との間にどのような折り合いをつけられるかという、新しい「根本問題」と言えるのではないだろうか。そして、この点から見れば、ガーフィンケルのその後の試みも極めて重要な意味を持つと理

解できると思われる。

本稿では、パーソンズとガーフィンケルの科学観の同型性、あるいはガーフィンケルの相互反映性概念とルーマンの自己準拠性概念の比較など、論じ残した課題も多く、また議論を単純化しすぎている面もあるが、以上でシュッツ＝パーソンズ論争への2つの応答を簡潔に素描したことにより、ひとまずは議論を終えることにしたい。

### <注>

- (1) パーソンズは功利主義思想の特徴のひとつとして合理性をあげる。合理性とは、目的・手段図式に基づいた、「効率性の合理的規範」だけを規範と考えていることを意味している。
- (2) よく知られたものとして、ロングの「過社会化された人間」[Wrong, 1961]、ガーフィンケルの「文化的判断力喪失者」[Garfinkel, 1964-1967=1989]などがあげられる。
- (3) シュッツ＝パーソンズ論争については、佐藤[1981]、浜[1989]の議論を参考にした。
- (4) シュッツのとった哲学的基礎づけとそれをフッサールの現象学に求めたことに何の問題もないわけではない。そもそも現象学が考察する超越論的自我を前提とすると、今度は他者の存在の証明が不可能になってしまい、独我論に陥ってしまう危険がある。シュッツはこのような現象学的ジレンマを回避しつつ間主観性の問題にとりくむため、超越論的次元における他者の構成の問題から身をひき、自然的態度において所与のものである他者の存在を前提とした、「自然的態度の構成的現象学」という形での問題設定をおこなった。ただしシュッツは間主観的同一性の問題に取り組む上で、社会秩序の問題という表現はとらなかった。
- (5) ガーフィンケルは「対応説」、「同一説」という考えをカウフマン[Kaufmann, 1944]から採用している[Garfinkel, 1952:92]。
- (6) (1)～(3)のまとめは浜[1995:59]に準じている。
- (7) ガーフィンケルは、「3つの構成的期待はルールの実現の内容に対して不変である」[Garfinkel, 1963:200]と述べている。しかしこれは、構成的期待に支配されていることと、基礎的ルールに従うことを厳密に区別した発言と理解するより、どのような現実のルールであっても、その背景の構成的期待の内容は同一であると理解するべきではないかと思われる。



(8) ここでとりあげている三目並べ実験のデータは Garfinkel [1963:204] の TABLE7-4 に  
よる。

(9) 三目並べ実験のほうで、構成的アクセントの移動を容易に行えたのは、三目並べがあ  
くまで「遊び」にすぎないという被験者の意識がそうさせたと考えられる。

(10) ルーマンの現象学批判は、「生活世界——現象学者たちとの対話のために——」  
[Luhmann, 1986=1998:101-126] を参考にした。

## <文献>

Garfinkel, Harold 1952 *Perception of the Other: A Study in Social order*, Ph. D. Dissertation,  
Harvard University (unpublished).

————— 1963 “A Conception of, and Experiments with, ‘Trust’ as a Condition of  
Stable Concerted Actions,” Harvey, O. J. (ed.), *Motivation and Social  
Interaction*:187-238, Ronald Press.

————— 1964 “Studies of the Routine Grounds of Everyday Activities,” *Social  
Problems*, 11-3:225-250. — 1967 *Studies in Ethnomethodology*: 35-75, Prentice-  
Hall. = 1989 「日常活動の基盤——当たり前を見る」北澤裕、西阪仰編訳『日  
常性の解剖学』: 31-92, マルジュ社.

浜 日出夫 1989 「シュッツ＝パーソンズ論争」『社会学ジャーナル』14 : 47-57.

————— 1992 「現象学的社会学からエスノメソドロジーへ」好井裕明編『エスノメ  
ソドロジーの現実——せめぎあう〈生〉と〈常〉』: 2-22, 世界思想社.

————— 1995 「ガーフィンケル信頼論再考」『年報筑波社会学』7 : 55-74

————— 1996a 「秩序問題のパラダイム転換——【共通価値】から【信頼】へ」『社会科  
学の新しいパラダイム』: 119-133, 筑波大学大学院社会科学研究科. — 1997  
「【共通価値】から【信頼】へ——秩序問題のパラダイム転換——」, 駒井洋  
編『社会知のフロンティア——社会科学のパラダイム転換を求めて——』: 83-  
106, 新曜社.

————— 1996b 「もうひとつの秩序問題——ジンメルからガーフィンケルへ——」『社  
会学史研究』18:27-37.

Kaufmann, Felix 1944 *Methodology of the Social Science*, Oxford University.

Luhmann, Niklas 1968 *Vertrauen: Ein Mechanismus der Reduktion Sozialer Komplexität*, F.  
Enke. =1990 大庭健、正村俊之訳『信頼——社会的な複雑性の縮減メカニ  
ズム』勁草書房.

————— 1984 *Soziale Systeme: Grundriß einer Allgemeinen Theorie*, Suhrkamp. =

- 1993/1995 佐藤勉監訳『社会システム理論』（上・下）恒星社厚生閣。
- 1986 “Archiv für Rechts- und Sozial Philosophie” LXX /Heft2, Franz Steiner, Wiesbaden GmbH. = 1998 青山治城訳「生活世界——現象学者たちとの対話のために——」『情況』（第2期）9-1:101-126, 情況出版。
- 名部 圭一 1992 「パーソンズの行為理論における諸問題——秩序問題は社会学の根本概念か」『ソシオロジ』37-2:93-110.
- Parsons, Talcott 1937 *The Structure of Social Action: A Study in Social Theory with Special Reference to A Group of Recent European Writers*, McGraw Hill. = 1974/1989 稻上毅、厚東洋輔、溝部明男訳『社会的行為の構造』1-5, 木鐸社。
- Parsons, Talcott & E. A. Shils (eds.) 1954 *Toward a General Theory of Action*, Harvard University Press. = 1960 永井道雄・作田啓一・橋本真訳『行為の総合理論をめざして』日本評論社（部分訳）。
- Schutz, Alfred 1962 *Collected Papers I: The Problem of Social Relativity*, Martinus Nijhoff.
- 1964 “Part II; Applied Theory,” *Collected Papers II: Studies in Social Theory*, Martinus Nijhoff. = 1980 桜井厚訳『現象学的社会学の応用』御茶の水書房。
- Schütz, Alfred & Talcott Parsons 1977 *Zur Theorie Sozialen Handelns: Ein Briefwechsel*, Suhrkamp. = 1980 佐藤嘉一訳『シュッツ＝パーソンズ往復書簡集——社会学理論の構成』木鐸社。
- 佐藤 嘉一 1981 「社会的事実の構成——シュッツ＝パーソンズ論争によせて——」『社会学研究』40:75-92.
- Wrong, Dennis 1961 “The Oversocialized Conception of Man”, *The American Sociological Review*, 26:183-192.

（なかにし みゆき／筑波大学大学院）